東京学芸大学　令和６年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

研究課題	外国人児童生徒等のアイデンティティに根ざした教育実践実現のための基礎的研究	
氏名 米本和弘	所属 教職大学院	職名 准教授

APRIN e-ラーニングプログラムの受講　■←受講済の場合はチェックをすること

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

学齢期の子どもに対する日本語教育では，子どものアイデンティティを尊重した教育の重要性が指摘されている。ただ，子どもの発達段階を考慮して，特に心理学的観点から議論される傾向にある。その結果，アイデンティティが不確実なものから確立されたものへと直線的に変化するものと考えられることにより，アイデンティティが言語や文化といった一側面から捉えられ，子どもの行為主体性が制限される危険性も孕んでいる。そこで本研究では，1）子どもの行為主体性と言語学習及びアイデンティティとの関係性を整理した上で，2）その教育を実現できる教員に求められる理解と支援への視点はどのように育成できるのかを明らかにすることを目的とした。

本研究では，申請者が講師を務めた２回の研修及び，１回のセミナーを対象とし，データ収集を行った。研修及びセミナーの詳細は以下の通りである。

	テーマ	対象	参加者数
研修	アイデンティティから考える自己表現とことばの教育	学校及び地域で日本語指導に携わる教員及び支援員	88 名
研修	多言語･多文化の子どもたちのアイデンティティを理解する	学校及び地域で日本語指導に携わる支援員	24 名
セミナー	言語的文化的に多様な子どものアイデンティティと教育	本学学部生及び教職大学院生	12 名

これら３回の研修・セミナーでは，参加者自身のアイデンティティについての意識化を入口に，応用言語学分野における，アイデンティティに関する議論を概観し，言語や文化といった観点ではなく，「行為主体性」（子どもがそれぞれに置かれた状況の中で行動を起こすことができる力）という観点から捉えることの必要性を，多様な背景を持つ子どもの実態に即して明示的に示した。その上で，参加者が関わる子どもたちの支援や指導にどのように活かすことができるのかを考える機会を提供した。研修・セミナー中の参加者の様子や反応，事後に実施したアンケートへの回答をデータとし，質的に分析した。

収集したデータからは，これらの研究やセミナーが，子どもの言語教育においてアイデンティティについて考慮することの重要性を再確認する機会となったことが伺われた。ただし，そのように重要性が認識された場合であっても，具体的に指導や支援への応用を検討する際には，言語や文化に焦点が当てられてしまったり，本質的なアイデンティティ観をより強固に反映してしまったりする危険性が示唆された。その背景には，アイデンティティを含む，子どもに対する言語教育に関して，参加者が外国人児童生徒等を他者化する視点に十分に働きかけられていなかったことが要因としてあることが考えられる。

これらのことから，今後の研修等においては，上記の内容に加えて，具体的な指導事例などを示したり，それらを各自の教育実践と比較したりすることによって，自身が持つ言語教育観や，それに基づく教育実践をふり返ることができる機会をつくる必要性があると考えられる。

【研究成果発表方法】

本研究の成果は，2025 年度に開催される日本語教育学会の秋季大会や言語文化教育研究学会の年次大会などに発表応募する予定である。

※発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに１部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。